

日本近代教育史研究における軍隊教育研究の意義

高野 邦夫*

A Great Significance of Studying the Education in Army and Navy for the Historical Research of Japanese Modern Education

Kunio TAKANO

Abstract

When I wrote my master's thesis on a historical study of "the Kyōgaku-Sasshin Hyōgikai" about 35 years ago, I found the basic relation between the education and training of Japanese Imperial army (Army War College etc) and the national education.

This is a report of my recent ten years study of the education in army and navy.

Key words: education and training in army and navy, national education, schools of army and navy

〈はじめに〉

本稿の意図する所は、第2章で具体的にみるように、1990年10月の第34回教育史学会大会(東京大学教養学部)で「日本近代教育史研究における軍隊教育研究の位置と意義—軍隊教育令と軍隊教育規則¹⁾を例として(研究序説)—」を発表して以来、10年間にわたって、海軍兵学校、海軍大学校、陸軍大学校、陸軍士官学校、陸軍幼年学校、陸軍予備士官学校、海軍予備学生、海軍の少年兵(予科練を中心として)、陸軍における少年兵の問題について、研究発表を積み重ねてきた経過と蓄積にたつて表題のような問題提起を行なおうとすることにある。

10年間の調査・研究の中で考え続けてきた問題、すなわち、何故、戦後における日本近代教育史研究において、軍隊教育の研究がないがしろにされ、取組みがおくれかつ不十分だったのか、その結果、今日に至るまでも後述のような

幾つかの業績を除いて、研究成果の結実・発表が不十分なのか、という問題について考えてみようとするものである。

そのために、第一として、ごく大ざっぱにはあるが、10年間の調査・研究の中で学んだ先行研究の成果と問題点にふれる。第二に、それらと対比することを意図し乍ら、筆者の10年間の研究の概要を簡単に紹介する。第三に、その二つの作業の上になつて、先述の課題について筆者なりの考察を加えたいと思う。

本稿の中心テーマである、戦後の教育史研究における軍隊教育研究の弱さ・不十分に対する考察を本格的に展開しようとするならば、詳細な研究史追跡の上になつて果されなければならないのであるが、それは今後の課題として確認しここでは、本稿の中心テーマを考察する上での必要最小限の範囲に限定することを予めお断りしておく。筆者の10年間の調査・研究の到達点を自分なりに確認し、新たな研究のスタートを切るために試みる作業であつて、本稿を“研究ノート”とした所以である。

平成12年10月13日受理

* 総合教育センター・教授